

B・Bと組織をめぐる断想

蓮台寺 晋

て不十分である、というのである。

この埴谷・江口の指摘は、必ずしも誤りではないだろう。(埴谷と江口の相違は、ここでは問わない)しかし、このような論理の延長上にいくら反省を重ねても何も出てきはしない、というのが、率直な感想であった。

かつて埴谷は、彼の本が意外にも政治青年に読まれているらしい、という意味のことを書いていたが、実際、六〇年代に学生運動にふれたもので埴谷を読まなかった者はない、といっても決して過言ではない。新左翼諸党派は、いわば埴谷の外套の下から出てきた、というわけである。もちろん、私も、「われわれ」も。

埴谷の発言を聞こうとしなかったのでは決してない。彼の批判は党派の活動家たちにも重く響いていた。しかし、埴谷をいくら読んでも、そこに運動の論理は見出せず、あるのは未来の無階級社会から逆照射する現在への批判であった。だから、埴谷は全共闘運動によって乗り超えられることにもなるのである。

潮が引いていくように、ボサノバの曲が消え、今度はちよつと

仄暗い正面の壁に架けられた少し歪んだバルドーの顔を見つめながら、Lはひとり言のようにぼそつと言った。

「アナキストには二通りある、組織を肯定するやつと組織を否定するやつと。ただ、何もやらないのは同じだ。だから、……」「だから」と言いかけて彼は口をつぐんだ。(だから、俺たちはアナキストではない)のか。(だから、俺たちはアナキストであつてはならない)のか。

B・Bの唇は、何か物言いたげに少し開いている。ボサノバのけだるいリズムが繰返し続いている。

Lは気の利いた冗談のいえるようなやつではない。私は、先ほど読んだばかりの「アナキズム」のことを思い出していた。

江口幹が、埴谷雄高を引用しつつ、「しかし、革命運動内部の革命は行われ始めたとは思われず、彼(埴谷)の発言は一向に聞き入れられてはいない」と書いていた。二十世紀は革命の世紀であるとともに、革命の変質の世紀であつたにもかかわらず、革命家の反革命的役割に対する反省が、アナキストを含めて、きわめ

ジャズっぽいヴォーカルだ。

「このジュリー・ロンドンも悪くないな」

Lは黙って目を閉じた。

江口は、革命家によって革命が裏切られてきた、という。そして、変質のない形の革命を求めて、「被抑圧者の解放は被抑圧者である大衆自身の成熟いかんにかかって」おり、「来るべき社会の制度と倫理のあり方を決めるのは、新しい社会を誕生させる大衆組織自身である」と書いている。

だが、はたしてそうか。革命は裏切られたのか。「変質のない形の革命」などありうるのか。そのようにいう時の「大衆」とは何か。

私は、あえてアンチテーゼを立ててみる。何か考えようとするとき、私のよくやるテだ。

革命は、革命家によって裏切られたりしない。裏切ったとすれば、革命が革命家を裏切ったのだ。「変質のない形の革命」などありはしない。革命は必ず変質する。だからこそまた革命が必要なのだ。大衆自身の成熟？ あなたはいったい誰なのか?! これは、悪くない。

Lが目を開いて言った。

「あのバルドーは、どこかで見たような気がする……」

そうだ、江口は従来のアナキストを批判してはいるが、結局、言っていることは彼らと本質的に変わりはない(例えば、ヴォ

ーリンを見よ)。

革命は裏切られ、大衆は未成熟であった、という総括は、なるほど、いつでも可能な便利なものである。しかし、それでは、運動者の主体はどこかへ行ったのか。それで運動のダイナミズムが把握できようか。

「ゴダール、か」「……」

アナキストは、Lが言ったように、組織を肯定しようとするか否定しようとするか、ダイナミズムを見失っている。組織には権力がつきものだから、組織を否定する、というのは、何とも後ろ向きな発想である。しかし、だからといって、権力のない組織、自由連合、というだけでは、未だ前者の裏返しを超えていないのではないだろうか。

大沢正道は、前者を論駁し、後者を組織一般論として展開したが、組織のダイナミズムないし実践的組織論に関しては、わずかに「組織の中の人間」と「人間の中の組織」の間の緊張・弛緩として、比喩的に語ったにすぎない(「組織論の革命」、『反国家と自由の思想』)。「アナキズムの原理と原則」を見ると、せいぜい行動委員会どまりで、彼も積極的にかかわっていたはずのアナキスト連盟のような組織に関してはまったく言及していない。おそらく戦後の最も早い時期にアナキストの組織論の限界にぶつかった一人である大沢は、それ故、「権力の理解の仕方について」(「ヒロバ」五七年)を書き、従来のアナキストの権力把握を超え、自己権力論につながる発想を見せたのだが、「組織論の革命」

以降、いっとうに展開しようとしなのは、己の限界を設定しているからであろうか。

ジュリーの歌がバラード調に変わった。

「The loveliness of Paris seems somehow sadly gay
語りの一部分だけが妙に耳に残った。……」

現実に革命運動を展開しようとするれば、生活空間（職場、地域）における階級的結合およびその連合（生産および再生産における関係を媒介として成立する）のみならず、生活空間を超えたイデオロギー的結合が必然的に生まれてくる。イデオロギー的結合が生まれてくることは、人間が肉体（空間的に規定される）と精神（空間を超える）を合わせ持ち、しかもその統一体であること、従って両者に緊密な相互媒介関係があることから、説明できようか。とすれば、前衛—大衆といった図式とは関係のないところに、イデオロギー的結合を生み出し、突き動かしていく源泉が存在することになる。

もちろん、イデオロギー的結合であるから、そのイデオロギーによって、とりわけ、その一部をなす組織論に、その結合の実態が大半は規定されることになる。また逆に人間は觀念だけでは存在しえないから、生活も組織実態を大きく規定しよう。しかし、まず第一に重要なことは個々の人間の内部に、イデオロギー的結合の根拠と動因がある、ということである。

だから、私の考えでは、革命運動においてイデオロギー的結合を否定することはナンセンスだ、ということになる。そして、肯

定する場合も、いわゆる理論からその必要性が導き出される以前に、その根拠と動因があることを理解していないと、とんでもない錯覚に陥りかねないのではないだろうか。

このように考えるとき、私の組織論の出発点は、アナキストのそれとだいぶズレてくるようである。

アナキストは権力なき組織を求め、一致できるところで一致する自由連合制によつて、組織内での矛盾をできるだけ排除してきただといえる。しかし、その実態は、何もしないうちにはアナキストというだけで「連合」し、何か起きるとたちまち分裂という傾向が濃かつたのではないだろうか。少なくとも、「連合」が、個別構成部分の総和＋アルファの力を有効に発揮しえなかつたように思う。

中央集権制を排除することで、スターリニズム的疎外をあらかじめ存在しないようにすることができたとしても、革命組織としては、それだけでは不十分であろう。コミュニケーションやサンジカの戦いの媒介として革命運動を推進する力を発揮しなくては、マイナスがない代わりプラスもない無用の長物となるう。

前述のように、アナキストはダイナミズムを見失っていた。一つだけ糸口として具体的にいえば、矛盾をあらかじめ組織外に排除しようとするこゝ自体に問題があるのではないか。ここから私の夢想が始まる。

以前は、私も、自由連合制の前提としての、絶えざる自己変革と真摯な相互批判を強調し、実現すればよい、と考えていたが、どうやらそれだけでは不十分なようである。

いま私は、現実の矛盾を積極的に内部に取りこんでいくような

組織を夢想する。生きた矛盾をかかえこみ、その矛盾がいっそう生き生きとして社会に発現されるような回路をもった組織である。この組織は、無謬性ではなく可謬性を前提とし、むしろ誤謬を犯した際の復元力をメルクマールとする。

この夢想からすると、そのイデオロギー的結合の外面は、心情の共同性を基盤にしたゆるやかな綱領的一致となろうか。

あえて一言でいえば、エスエルのわれわれの再生、日本社会革命党である。

しかし、この夢想は未だ夢想の域を脱してはいない。いや、いまのところ、脱しようがないというべきか。なぜなら、組織は、理論とかイデオロギーとかだけで作れるものではない。豊か、豊富な組織活動の経験の上に、さらにさまざまなものがプラスされて、ようやく形をなし、力を発揮するのである。エスエルの前には数十年に及ぶナロードニキの苦闘があり、それでもなおエスエルは敗れ去ったことを忘れてはなるまい。

とはいえ、夢想も、ある段階においては、一つの力となることも事実である。

「男が自己をやり直すのは、ただ女によってでしかない……」
「はまた一人言のように言った。」

「ニザンか、まあ本当だな」
「あるいは戦争、革命によってでしかない」
再びボサノバの曲が流れ出した。バルドーは相変らずちよつと顔を歪めて微笑んでいた。

私たちは外に出て別れた。外は、まだコートなしでは少し寒か

った。しばらく歩くうちに、私はLがああバルドーをどこで見たか、ようやく思い当たった。「戦士の休息」——もうかなり前のフランス映画である。そういえば、Lはああ時のB・Bの相手役に似ていないこともない。

『アナキズム』誌 バックナンバー紹介

六号 特集Ⅱ コミュニンの再検討

地方自治体論・覚え書き 野本三吉／コミュニティへの期待
江口幹／キブツのことバレスチナのこと 広河隆一

連載・戦後アナキズム運動史年表／金宗鎮伝／クロンシュ
タット・イズヴェスチャ 他 三五〇円

五号 特集Ⅱ 自治管理・労働者評議会

自治管理への問いかけ 安田信治／評議会社会主義について
江口幹／自治管理と社会 A・メエステル 他 三五〇円

四号

地域合同労働組の可能性を探る／救援組織の確立に向けて／
子供達と共に／衛戍令下の韓国のアナキズム運動／外国のア
ナキスト・グループ 他 二五〇円

三号

特集Ⅱ 朝鮮人のアナキズム運動／宋世何・リヨンク・尾関弘
△石油危機△以後とアナキストの仕事／ドイツ労働者評議会
の起源 他 二五〇円

(振替 東京二一四一六一一 アナキズム編集委員会)

潮 流

1月～3月のメモ

活動メモ
機関誌・紙／自主流通誌・紙
新刊書籍

構成 編集部

活動メモ

3・2 「自由連合・自由連合新聞」復刻
版刊行記念講演会が開催される。

講師 小松隆二・相沢尚夫（「自由連合・自由連合新聞」復刻版刊行会）

3・7 月例交流会（東京）

3・9 コミュニ百人委員会、弥栄之郷共同体の母屋・新館全焼事故により、同共同体救援委員会を発足させる。

3・21 23 アナキズム研究センター、春季キャンプを行う（富士宮）

機関誌・紙／自主流通誌・紙

3・1 「共同文庫」運営委員会「神戸共同文庫」を創設する（神戸）

3・2 フリー号連帯行動実行委員会、同

号訪問報告を行う（東京）

1月

▽リベルテール 1月号（東京都練馬区大泉学園二一九〇 萩原方 リベルテールの会）いたずら小鬼のゆくえ

▽大道貫古今 8号（岩佐作太郎遺稿集刊行会）サンジカリストへの反駁

▽労働運動 12号（富士市伝法上中町二七一 富士地区一般産業合同労働組合）講演記録・大逆事件の真相

▽リベロ 25号（京都市左京区由中門前町二八五リベロ社）

▽はお・炎 に号（東京）

2月

2月

▽リベルテール 2月号（東京 リベルテールの会）アナキズムとオカルト

▽サルーン通信 一七五号（大阪市阿倍野区旭町一〇二二 泉原文化内 向井孝）助っ人論ノート（上）

▽血乱死 2月号（東京都練馬区上石神井一七四〇一四 人間社）

▽黒旗の下に 4号（東京都文京区後楽二一七五 啓衆ビル4F ランチョ気付）黒旗こそ人民の旗だ

▽海燕通信 5号（東京都千代田区内神田

一四一六 海燕書房

▽関西地方準備会ニュース 1号(京都市

東山区山科北花山六反町二六八 晴

栄荘内 奥田氣付 無政府主義者連盟関

西地方準備会) 関西地方準備会の質的強

化へ向けて

▽ほのお・炎 さん号(東京)

▽生活者 2月号(横浜 加藤)

▽岳麓労働 一二四号(富士 富士地区一

般産業合同労働組合) 富士地区労働運動

史メモ

▽パランカ 一五九号(秋田市將軍野南一

一〇二八 草階方 頭脳戦線社) 季

節風他詩数編

▽リベロ 26号(京都 リベロ社) 情

報紙における自由連合の追求について

▽アナキズム 6号 特集・コミュニケーションの

再検討

▽フレイ号ニュース 155号(東京都大

田区西蒲田七六一八 エンリコビル

4F フレイ号連帯行動実行委員会) フ

リイ号出迎え日誌

3月

▽リベルテール 3月号(東京 リベルテ

ールの会

▽コミュニケーション・ヒロバ 緊急号外号(大阪市

東成区東成玉津郵便局留 コミュン百人

委員会) 弥栄之郷共同体救援委員会発足

▽非暴力直接行動 6号(姫路市亀山三五

四 戦争抵抗者インターナショナル日本

部) インド・非暴力直接行動の闘い

▽サルートン通信 一七六七号(大阪

向井) 助っ人論ノート(中・下)

▽関西地方準備会ニュース 2号(無政府

主義者連盟関西地方準備会) 全国連盟結

成を克ち取る為に組織路線論争を強化せ

よ!!

▽血乱死 3月号(東京 人間社) 黒の宣

言―運動論・序

▽ほのお・炎 よん号(東京)

▽神戸共同文庫会報 1号(神戸市葺合区

上筒井通六二二一三 神戸共同文庫)

▽WRI 2号(大阪市あべの区旭町二一

一二二 泉原文化気付 水田ふう) 釜

ヶ崎越冬テント村の八日間(上)

▽準備会ニュース 2号(東京都杉並区高

円寺北二二二〇 東雲閣内 中島博

幸氣付 無政府主義者連盟関東地区準備

会) 第一回関東地区準備会議報告

(新刊書籍)

1月

▽婦人運動の単一体系 高群逸枝 青蛾房

▽アナキスト革命(新訂版)

ジョージ・バレット 黒色戦線社

2月

▽自由連合・自由連合新聞(復刻版)

海燕書房

3月

▽アナキスト

ジェームス・ジョル 岩波書店

▽ディナミック(復刻版)

石川三四郎 黒色戦線社